



入学試験問題
国語

函館ラ・サール高等学校
2021年1月16日

〔問題一〕 次の各文の —— 線部の読みをひらがなで書きなさい。

- (一) 歓迎の催しが開かれる。
- (二) 過去の行いを省みる。
- (三) 応急処置を施す。
- (四) 新たに政権を掌握する。
- (五) 現代社会に警鐘を鳴らす。

〔問題二〕 次の各文の —— 線部を漢字に改めなさい。

- (一) 古代文明がサカえた地。
- (二) オサナい妹の世話をする。
- (三) 部屋をセイケツにする。
- (四) 国王にチュウセイを尽くす。
- (五) 旅客機をソウジユウする。

〔問題三〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

数字は分かりやすい。数字を「出発点」として捉えるのではなく、数字を「結論」としてしまえば、そこには議論の余地がない。数字の大小で優劣が決まってしまう。だから数字で語れば、人と人との間で議論をする必要がない。A、コミュニケーションの必要がないのだ。

そして、数字で語れば頭を、感性を使わなくてもいい。数学六〇点と聞けば、「八〇点を目指せ」と言っておけばいいし、視聴率競争では「この前負けた視聴率を取り戻せ！」とはっぱをかければいい。特に自分の頭と感性を使わず、決まり切ったことを言っ

おけばいいのだ。

そういった社会とはいかなる社会だろうか。それは様々な価値観、「生きる意味」を持った人たちの多様な意味づけの中で、互いに話し合いながら合意を形成していくのではなく、「生きる意味」を*捨象して、横断的に通用する「数字」で物事を解決しようとするような社会だ。ひとりひとりが固有な「生きる意味」の世界を生きていることには配慮が払われず、効率的な「数字」がひとり歩きしていく。

①「数字信仰」は私たちの「コミュニケーション」を犠牲にする。私たちの社会で交わされるコミュニケーションはとてつもなく薄っぺらいものとなっていく。

かつてニューヨークに住んでいた私の母から恐ろしい話を聞いたことがある。パーティーで初対面の人たちが出会ったとき、当然「あなたはどんな職業なの？」と聞き合うが、聞き慣れない職種を相手が言ったとき、「それはどんな職業なの？」と聞くかわりに、あるときから「それで、それってどのくらいの年収なの？」と質問し、年収の額を聞いて「ああ、だいたい分かったわ、ありがとう」という会話が目立つようになってきたというのだ。ひとりひとりの職業という「固有の意味」をお互いに知り合うことなく、「年収」という薄っぺらな数字を知ることでは話が終わってしまう、②そんな「豊かな」社会がそこにはある。

しかし、そのアメリカのパーティーでの話を私たちも笑えない。この日本社会で通用してきた会話もまた、「どこにお勤めですか」「○○商事です」「まあご立派な会社にお勤めで」とか、「どの学校に行ってるの？」「△△高校です」「ふーん」といった、表面的な会話ではなかったか。会社の名前を聞いたからといって、それ以上のことは分からない。その会社で一体どんな仕事をしているのか。どんなことを生きがいに行っているのか。いまだんなことに悩んでいるのか等々、などなどそういった固有の「生きる意味」を聞くことなしには、その人とのコミュニケーションとは言えないのだが、会社の名前を聞くだけでそれ以上のことに興味を持たないようなコミュニケーションのあり方がまかり通ってきたのだ。

それはいま地球上で起こっている問題でもある。世界には様々な文化があり、ひとつひとつは固有の世界観を持っている。またひとつの文化の中でも、ひとりひとりが異なるものの感じ方、考え方を持っている。そうした「多様性」があるからこそ、私たちは他者の世界を理解しながらコミュニケーションを行う必要があるし、それは私たちの「生きる意味」の世界を豊かにしていくものである。

ところがその反面、そうした多様性は、効率性の悪いシステムであると言える。相手の文化的な背景を理解し、「生きる意味」のありかを理解しようとしていては、コミュニケーションの効率は良くない。そこには様々な誤解や齟齬そごが当然生じてくるし、そこを乗り越えていくには時間がかかるのだ。私のような文化人類学者にとっては、そうした誤解や齟齬こそがまさに私たちのそれまでの思い込みを破壊し、新たな認識を深めていくいいチャンスとなるが、しかしそういったコミュニケーションのあり方に苛立つ人たちもい

る。

世界が多様な文化によって成り立っていることによる非効率性、それを解決するのが「数字信仰」に他ならない。その文化がどうであれ、一万ドルは一万ドルでしょう？ 年収三万ドルのほうが一万ドルよりも望ましいでしょう？ だからどんな文化に属する人でもみんなが数字の大きい方を求めていきますよね？ というわけだ。グローバルイズムが依拠しているのは、まさにこの「多様な文化を超える数字信仰」に他ならない。数字は効率的だ。数字は分かりやすい。相手の「生きる意味」だの何だの、面倒くさい話をする必要がない。数字があれば瞬時にコミュニケーションが取れる。ハウマツチ？ とさえ聞いていけばいいのだ。

B、現在の世界で起きていることは、そうやって誰にも通用する「意味」を求めるあまり、結局のところ誰の意味にもならなくなる、という皮肉な現象である。収入の数字が上がればそれだけで幸せになるという薄っぺらな「生きる意味」では、私たちは自分の大切なものが置き忘れていると感ずる。どんな国もGDPの数値を上げることが目標だと言われると、私たちの文化的伝統はそんな薄っぺらなものではないと言いたくなる。分かりやすい「数字」で私たちの「生きる意味」が規定されようとするとき、私たちはその分かりやすさに魂を奪われそうになりながら、「そんなはずはないのだ」と自ら葛藤する。その葛藤がいまこの地球上のいたるところで、あるときはテロリズムや戦争となつて、あるときは若者の反乱となつて、あるときは鬱病や自殺となつて、様々な形で現れているのである。

「数字信仰」からの解放が求められている。数字は私たちが使いこなすものだ。私たちが数字に使われるようになっては、私たちの「生命の輝き」は死んでしまう。そして、私たちの豊かなコミュニケーションは失われ、私たちの思考力と感性も死に絶えてしまう。そして、ここにかけがえのない「生きる意味」を持った私がいれば、そこにかけがえのない「生きる意味」を持ったあなたがいるという、この世界の豊かさから私たちが追放されてしまう。

二〇世紀は数字の勝利の時代であった。そして数字が豊かさをもたらす時代であった。しかし二一世紀もその信仰が豊かさや幸せをもたらす続けるだろうかと考えるとき、私は **C** にならざるをえない。数字信仰がもたらす弊害を私たちは既に気づかざるをえないところまでできている。数字的にはもうこれだけ私たちは豊かになったのだ。いまこそその数字への執着を手放すこと。そして真の豊かさ、「生きる意味」の豊かさへとシフトすること。そのプロセスこそが、二一世紀初頭の私たちの文明的課題なのである。

(注) * 捨象 〓〓〓では、考察の対象から外すこと。

(上田紀行『生きる意味』より)

(一)

A	B
---	---

 に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア…〔A〕だから B あるいは

イ…〔A〕さらに B ただし

ウ…〔A〕つまり B しかし

エ…〔A〕また B たとえば

(二) — 線部①「数字信仰」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

I 「数字信仰」を持つことの利点を、筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多様な文化が併存するために円滑にコミュニケーションを進めるのが難しい状況で、余分な情報のやりとりをせずつ素早くコミュニケーションを取ることができる。

イ 非効率になりがちな異文化間でのコミュニケーションにおいて、数字を用いた効率的なやりとりを重ねることが、結果的に異文化理解を深めることにつながる。

ウ 文化の多様性が重視される現代において、数字を用いたコミュニケーションを取ることによって文化的な背景を正しく理解できるため、異文化間の誤解を招かずに済む。

エ 数字による簡易的なコミュニケーションによって、それぞれが固有の世界観を持っているひとつひとつの文化に対する認識を新たにすることができるといえる。

II 「数字信仰」に抵抗した結果として引き起こされる具体的な行動が列挙されている一文を本文中から探し、その最初の五字を抜き出しなさい。

(三) — 線部②「そんな『豊かな』社会がそこにはある」とありますが、筆者がここで『豊かな』社会」と表現していることの意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初対面の相手同士でも気軽に年収を言い合うことができるほど、アメリカ国内の生活水準が高く、国民が豊かな暮らしをしてい

ることを強調して伝えている。

イ 数字による表面的な事実が交わされるだけの、情報のやりとりで乏しく決して豊かとはいえない会話が、アメリカという経済的に豊かとされる大国でまかり通っていることへの皮肉をこめている。

ウ 相手の年収を聞いただけで終わってしまうような薄っぺらい会話がアメリカで目立ってきたことをふまえ、同じ先進国でも日本とアメリカでは文化的な成熟度という点で差があることに疑問を投げかけている。

エ 多くのことを聞かなくても、年収という数字による情報だけで初対面の相手がどういう人かある程度推測できるほど、アメリカ人が想像力豊かな国民であることを述べている。

(四) C に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 独善的 イ 内向的 ウ 理性的 エ 否定的

(五) 本文の説明の仕方として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いかにして「数字信仰」からの脱却を図ればよいかを、専門家の意見を参照しながら説明している。

イ 身近なところでも「数字信仰」による弊害が生じうるということを、読者と疑問を共有するように説明している。

ウ 「数字信仰」と共存しながら現代を生き抜いていく術すべを、筆者自身の体験をもとに順序立てて説明している。

エ 「数字信仰」を持つことよって世界にいかなる影響が出ているかを、具体例を豊富に用いながら説明している。

(六) 本文中で筆者は、どうすることが現代に生きる私たちの課題だと考えていますか。本文中の表現を用いて、六十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

〔問題四〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

高校生の「わたし（櫻井）」は、書道教室に通っていて、先生に好意を寄せています。

無言のまま、ひたすら書き続ける。どういうわけか今日は上手に筆を抜くことができなかった。字の終わりにすつと筆を上げるのだけれど、不器用というか、ぎこちないというか、とにかく収まりが悪いのだ。気にしているうち、ますます下手になっていく。

やがて先生がやってきた。

「なるほど」

そう言ったまま、ただ見ている。緊張が高まり、上手に書くどころではなくなってしまった。並ぶ字はバラバラだし、まっすぐに線を伸ばすこともできず、ひどいものだった。書き上げた半紙を重ね、息を吐く。

「どうにもよくないね」

先生が言った。

はい、と頷く。

「今日は駄目な日みたいです」

「あるけどね、たまに」

「先生でもですか」

「もちろん」

先生はわたしの筆を取ると、丁寧に墨をつけ、半紙をわたしの前に置いた。肩越しに手が伸びてきて、さらさらと字が書かれる。いや、書かれるというより、現れるという感じだった。①不自然な体勢なのに、まったく力が入っておらず、見事なものだった。あまりに先生の腕が近いものだから緊張した。②身が固くなってしまう。

知る知らぬ

なにかあやなく

わきていはん

思ひのみこそ

しるべなりけれ

こんなものかなと言つて、先生が腕を引いた。それでも背中に気配を感じる。はいと頷いた声は震えていただろうか。庭で蝉が鳴いていた。いくらか気が早いけれど、確かに夏が近づいていた。

「最近、櫻井さんは和歌をよく書いてるね。漢文じゃなく。どうしてなんだろう」

「ああ、そういえば」

「意識してなかったのか」

「なんとなくでした」

他の教室に通つたことがないので、確かなことはわからないけれど、* 臨書を行う場合には漢文を手本にすることが多いそうだ。書の歴史は古く、作品もたくさん残っているの、何百年、あるいは千年以上前のものもある。それが最高の作品だとされていることも多い。たとえば * 王羲之の『蘭亭序』は四世紀に書かれたものだ。要するに書というのは、はるか昔に完成し、高みに至つてしまつたのだ。

③ 「考えてみれば書つて悲しいですね」

「どういふこと……」

「最高と言われる作品は、はるか昔に書かれていて、それを超える評価をいまさら得ることは無理じゃないですか。王羲之の『蘭亭序』とか。だとしたら、わたしたちはなんのために書いているんでしょう。決して超えられない山に登つていっているというか」

「言いたいことはわかるよ」

頷いたあと、先生はしばらく黙っていた。突然の沈黙だつたけれど、ちつとも不自然な感じはしなくて、わたしの心はだんだんと落ち着いていった。わたしは今、正座をして、先生が書いたものに向かい合つている。とても流麗で、美しく、そして芯の強い字だつた。わたしが書いたものとはまったく違う。上手下手はもちろんだけれど、確かに個性が表れていた。不思議なものだ。たったこれだけの文字、決められたものを写しただけなのに。

「でも僕はそう思わない」

「なぜですか」

「君は笑うかもしれないけど、僕はね、いつか王羲之さえも超えられるんじゃないかと思つているんだ。僕だとは限らないよ。そこまで思い上がつてはいない。ただ、いつか、ふと見つかるかもしれない。無名の誰か、ちゃんとした教えを乞わず、我流で黙々と書いて

きた人が、とんでもない作品を残しているとかね。書は技術だけど、それだけじゃない。その人の思いや強さ、あるいは狂おしいほどのなにかが表現されるんだ」

ふと気になったことを尋ねた。

「どうして先生は、自分だとは限らないって言うんですか」

「王羲之を超えるなんて言えないよ」

「超えてください」

「怖いことを言うね。そうであればと願うけれど、長くやっていると凄さがわかるから。王羲之だけじゃないよ。* 欧陽詢だって、* 虞世南だって、* 徽宗だって、長い長い歴史の中で認められ、残ってきたんだ。それを超えるだなんて恐れ多いよ」

「やっぱり悲しくないですか。届かないと知りつつ、挑むなんて」

「僕じゃなくていいんだよ」

「はぐ」

「いろんな人が挑み、山に登る。たいていの人は……いや、ほとんどすべての人は山を登り切ることさえできないだろう。それでも僕たちは挑み続ける。百年も、二百年も、あるいは千年もかけて。そしていつか登り切り、超えていく人が出てくる。きつとね」

頭に風景が浮かんだ。ぞろぞろと山に登っていく人たち。彼らは自分が登り切れないことを、いつか潰えることを、ちゃんと知っている。それでも足をとめない。登り続ける。そうしているうち、やがて頂にたどりつく人が現れるのかもしれない。

ああ、わたしはどちらなのだろう。登る人なのか、眺める人なのか。

登る勇氣など、わたしにはなかった。

眺めるだけで精一杯だ。

風が吹き、髪が揺れる。庭のほうから吹いてきたのだ。そちらを向くと、ひとりの少年が机に向かっていた。彼の足下には高く半紙が積まれている。わたしがほんの数枚書くあいだに、彼は百枚以上書いていた。目に曇りはなく、迷いもなく、筆の運びはしつかりしている。そこにあるのは、登る人の姿だった。自らが途中で潰えることさえ厭わず、恐れず、彼は高い高い頂を目指していた。

(橋本紡『葉桜』より)

(注) * 臨書 || 手本を見て書くこと。

* 王羲之、欧陽詢、虞世南 || 中国の書家。

* 徽宗 || 中国宋代の皇帝。

(一) — 線部①「不自然な体勢なのに、まったく力が入っておらず、見事なものだった」とありますが、先生が書いた字を「わたし」はどのようにとらえていますか。それを説明した次の文の [] に入る最も適当な表現を、それぞれ本文中から、 [A] は二字、 [B] は十八字で抜き出しなさい。ただし、読点も字数に含めます。

[A] の表れた、 [B] 字だと感じた。

(二) — 線部②「身が固くなってしまふ」とありますが、これとは対照的な「わたし」の様子が表れている一文を本文中から探し、その最初の五字を抜き出しなさい。

(三) — 線部③「考えてみれば書つて悲しいですね」とありますが、ここで「わたし」は具体的にどういうことが悲しいと言っていますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 往年の書家が残した最高級の作品から多くの技術や書の本質を学び取ろうとせず、我流で書の道を究めようとする事。
- イ 至高の作品を生み出したかつての書家たちを上回るような評価を得られると信じて、がむしゃらに書に取り組んでいく事。
- ウ 大昔に書かれた良質な作品を超えるようなものを作るのは不可能だと知りつつ、その事実を受け入れて書が続けていく事。
- エ 著名な書家が残した質の高い作品を手本とするだけにとどまり、自らの思いを書に表現する努力を怠ること。

(四) 本文中の先生の人物像として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 困っている「わたし」を助ける優しさがあながらも、淡々とした口調がかえって近寄りがたさを感じさせる人物。
- イ 穏やかで落ち着きのある態度を見せながらも、書に対する「わたし」の考えを批判するような冷徹な一面も併せ持つ人物。
- ウ「わたし」の話に共感を示す生徒思いの面があながらも、書に対してはどこか理屈っぽく考えるきらいがある人物。
- エ やわらかな物腰でありながらも、長年携わってきた書に対する確固たる自分の考えを語るところに熱意を感じさせる人物。

(五) 本文中の「わたし」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生との会話を経ても、書に対して抱いている後ろ向きな考え方は解消されず、書に対する明確な目標を見つけれないことに自分自身で情けなさを感じ始めている。

イ 先生とのやりとりを重ねるなかで、書に対して悲観的になりすぎる必要はないのではないかと思いつけるが、それでもなお、書の高みに挑み続けるといような前向きさは持てないでいる。

ウ 書への取り組みに行き詰まりを感じていたが、先生からの助言によって気持ちを立て直し、書の先人たちという大きな壁を必ず乗り越えてみせようという決意を固めている。

エ 先生が語る書に対する考え方に納得できずにいたが、頭に思い浮かべたりふと目にしたりした情景がきっかけとなり、書における自分の限界を悟ってあきらめの念を抱いている。

(六) 〰〰線部「ひとりの少年」は、本文中においてどういう存在として描かれていると考えられますか。本文中の表現を用いて、六

十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数に含めず。

〔問題五〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

日本語の歴史を①たどつてくると、現代の私たちは、過去の人々の大変な労力を知らずにア享受していたことに気づいたと思います。最もすばらしい過去からの贈り物は、日本語の文章です。漢字かな交じり文を採用し、言文一致を完成させてあるのです。平安時代にさまざまの文章をイこころみ、そのなかで最も優れている漢字かな交じり文を明治時代に採用し、現在に至っています。私たち現代人は、漢字かな交じり文を当たり前のように書いていますが、過去の人々の英知の賜物たまものなのです。漢字かな交じり文が優れものであることは、すでに述べました。そのほか、こんな特色もあります。語と語との間を切らずに書けることと、ちよつと、英語を思い出してください。

My father is ill in bed.

語と語の間には、必ず空白が入ります。これを日本語の漢字かな交じり文で書いてみます。「父は病気で寝ている。」となつて、語と語の間には空白が入りません。世界で最も体系的に作られているハングルも、世界で最も②簡素な文字体系のローマ字も、イスラム文化圏で通用しているアラビア文字も、すべて文章を書く時には、語と語の間に空白を入れて書く必要があります。同じ種類の文字が続くために、語の切れ目が分かりにくいからです。それに対して、漢字かな交じり文は、異種類の文字で構成されるために、切れ目を入れなくても、一目瞭然。さらに、句読点を併用すれば、わかりやすいことこの上なしです。

そのうえ、書くべき文章は、話し言葉と一致させてある。話し言葉と書き言葉が違っていると、書くために必要な語や言い回しを別にウ学ばなければなりませんから、文章を書くことのできる人間が今よりも少なくなつていたはずで、そして、何よりも、書き言葉が話し言葉と違っていると、自分の思いをストレートに表現することができない。思った通りに話し言葉で書けるといふことは、血の通つた文章ができるということなのです。話し言葉を存分に使える文章で、世界の傑作の一つ『③源氏物語』が書かれています。現代人は、『源氏物語』のような傑作を生み出せる可能性を手に入れているということです。

でも、油断をすると、④書き言葉はつねに話し言葉から離れようとして、すでに述べましたが、書き言葉は、話し言葉と違つて、目に見える形で存在しますので、保守的です。古い形をいつまでも保ち続ける性質があります。エ絶えず変化していく話し言葉についてゆけないのです。そのため、用心していないと、話し言葉との間に大きなズレを生じ、話し言葉とは違つた書き言葉独自の体系を作つてしまいます。そうなると、私たちはもう一度そのズレを修正するために言文一致運動を展開しなければならなくなります。せつかく長い時間をかけて昔の日本人が勝ち取つた言文一致の成果を大事にしたい、そう思っています。

(一) — 線部①「たどつ」と同じ活用の種類の動詞を、本文中の〓 線部ア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(二) — 線部②「簡素な」と、— 線部が同じ品詞になっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゆるやかに川を下っていく。

イ 名前を聞くのもうとましく思う。

ウ 小さな間違いが命取りになる。

エ 飼い犬がしきりに吠える。

(三) — 線部③「源氏物語」の作者は紫式部ですが、次の中から①作者名と②作品名の組み合わせとして**適当でないもの**を一つ

選び、記号で答えなさい。

ア… ① 川端康成 ② 雪国

イ… ① 谷崎潤一郎 ② 細雪

ウ… ① 夏目漱石 ② こころ

エ… ① 三島由紀夫 ② 羅生門

(四) — 線部④「書き言葉はつねに話し言葉から離れようとしています」を単語に分けると、いくつになりますか。漢数字で答えなさい。

(五) 〓 線部「語と語との間を切らずに書ける」とありますが、なぜ漢字かな交じり文は語と語との間を切らずに書けるのですか。

その理由として最も適当な表現を、本文中から十四字で抜き出しなさい。